ヴィクトル・ユゴーとボナパルティズム

高　村　忠　成

目　次

1．はじめに
2．ユゴーの思想遍歴
3．ボナパルティズムへの共鳴
4．ボナパルティズムの形成
5．ナポレオン3世との対立
6．結語—逆説の論理としてのボナパルティズム

1．はじめに

ヴィクトル・ユゴー（Victor Marie Hugo, 1802-1885）は，一般的には小説家として知られている。とくにロマン派の旗手として，19世紀の文壇を飾ったことは著名であり，思想的には，ヒューマニズムあふれる，共和主義の信奉者としてその名を馳せている。

しかし，こうしたユゴー像はその特徴の一端を描写しているが，ある意味では，ユゴーを矮小化しており，悪くするとその実像を歪めかねない危険性もある。というのは，実際のユゴーは，その思想や行動においてかなり多様であり，多面的であったからである。じつに複雑なダイナミックな面をもっていたのである。まず何よりも彼は，小説家というよりは詩人であり，また，たくさんの戯曲，エッセー，政治社会論，文学論も残している。その思想も，後にみるように時代とともに変遷を重ね，単なる共和主義では終っていない。

また，行動面においても，言葉を駆使して時代や社会を変えようとする文人としての側面をもちながら，実際に政治家として政治の舞台にたったことも多かった。政治家ユゴーとしての側面は，案外知られていないのである。とくに晩年のユゴーは，宗教的なものに凝り，降霊術に走ったりした。

このようにユゴーは，その実像は極めて多彩であり，多面的である。こうしたところから，ユゴーのことを放物面鏡ととらえる見方もある[1]。実にユゴーは，多くの偉大な思想家や人物がそうであるように，異なった光をあてるたびごとに新たな輝きを発する多角的な側面をもちあわせていたのである[2]。

とくに彼の思想遍歴は，本人も独白しているように時代とともに変化している。王政主義に始まって，自由主義，社会主義，民主主義そして共和主義へと移行して

いった。一時としてとどまらなかったのである。しかもその思想遍歴は，19世紀，フランスの政治体制の変化とほぼ符合している。これは換言すれば，ユゴーという人は，よくいえば時流の変化を見抜くのに長けており，悪くいえば時代に迎合しやすかったといえよう。いずれにしてもユゴーは，19世紀という時代とともに生き，その時代の空気を吸収しながら，時代のもつ矛盾の変革にとりくんでいった行動的な思想家であり政治家であったのである。

ただ，多様なユゴーの思想遍歴の中にあって，変わらぬものとして存在していたのが，ナポレオン・ボナパルト（Napoléon Ier Bonaparte, 1769-1821）への憧れ，すなわち，ボナパルティズム（Bonapartisme）であった。ナポレオン１世への憧憬ともいうべきボナパルティズムこそ，変化の激しいユゴーの思想遍歴の根底にあって，ほぼ終生変わらぬものとして存続し続けたのである。換言するならば，変動するユゴーの思想の断面を切り開くと，その奥にはつねにボナパルティズムの片鱗が顔をのぞかせていたといえる。彼がその大作『レ・ミゼラブル』（Les Misérables）を，1861年６月30日，ワーテルローの古戦場を訪れ，ナポレオン・ボナパルトのことを偲びながら，締め括った話はあまりにも有名である。ユゴーは書いている。「私は『レ・ミゼラブル』をワーテルローの古戦場で，ワーテルローの戦いのあったのと同じ月，今日，1861年６月30日午前８時30分に書き終えた[3]」と。

本稿は，こうした観点から，従来あまり顧みられることのなかった，ユゴーとボナパルティズムの関係を考察することを目的としている[4]。というのも，ユゴーにおけるボナパルティズムを把握することは，彼の思想をその基軸から理解する一助となり，また，ボナパルティズムにとっても，ユゴーによって，19世紀を生きぬく思潮として，その息吹を吹き込まれたという面があるからである。じつに，ユゴーとボナパルティズムの関係を考察することは，その両者のそれぞれの意味をより深く理解することに役立つであろう。

そこで本稿では，第１に，ユゴーの思想遍歴を概観し，その全体像を把握する。第２に，ユゴーがボナパルティズムのどこに共鳴したのか，両者の接点を探る。第３に，ユゴーのボナパルティズムはどのようにして形成されたのか，その原因を考察する。第４に，ボナパルティズムに傾斜したユゴーとナポレオン３世が対立した様相を描く，そして第５に，その対立の意味を掘り下げながら，ユゴーとボナパルティズムの関係の本質を剔抉していくことにする。

結論を先取りしていえば，ユゴーの思想の根底には，ボナパルティズムが一貫して流れており，それはロマン主義をはじめ，自由主義，社会主義，民主主義，共和主義をも貫いていて，とくに晩年，ユゴーがのめり込んでいった宗教的なものとも共鳴している部分があったといえる。大作『レ・ミゼラブル』は，その点を如実に示唆しており，ユゴーはナポレオン・ボナパルトの出現と衰退の意味を，その宗教観のうえから分析したのである。ユゴーにおけるボナパルティズムこそ，多様な思想遍歴を重ねた彼の胸中にあって，つねに存在していた不動の部分だったのである。

2．ユゴーの思想遍歴

ユゴーはその思想を生涯において何度も変えている。いな時代の変遷とともに，その考え方を変化させているのである。そのことをユゴー自らが，1850年代前半に，未定稿の中で自らの半生を振り返りながら，次のように独白している[5]。

「自分の時代の政治的変革や社会の変動が理解できるようになり，それらにかかわりを持つようになった年齢から，以下に示す段階をわたしの良心はあいついで経てきた。絶え間なく，一日として後退することなく，—私はこう自負するのだが—光に向かって進みつつ以下の段階を経てきたのである。

1818年—王党派

1824年—王党派・自由主義者

1827年—自由主義者

1828年—自由主義者・社会主義者

1830年—自由主義者・社会主義者・民主主義者

1849年—自由主義者・社会主義者・民主主義者・共和主義者」。

ここで注目すべきことは，ユゴーはこうした思想遍歴を，決して変節とはいっていないということである。むしろ，光に向かって進みゆく良心がそこには存在していたと自負している。彼にとっては，時代を貫く自らの良心が厳然とあり，それが時の経過とともに，あらゆる変革や変動の本質を見抜けるように発展してきたというのである。自分の良心は，光に向かってたゆまぬ向上を続けてきたということになる。

こうした彼の自己解釈は，そのまま受け入れるにしても，ひとつ気になる点がある。それは彼自身，自らがボナパルティストであるということには全く言及していない，ということである。彼自身，母ソフィー・フランソワーズ・トレビュシェが亡くなって，父ジョゼフ・レオポル・シジスベール・ユゴーと暮らすようになってからは，父の影響を受けて，ナポレオン・ボナパルトを尊敬するようになったことは事実であり，彼の多くの作品の中でも，ナポレオン１世への憧憬の念は明示されている。『ヴァンドーム広場の記念柱によせるオード』（1827年）は，ユゴーのボナパルティズムを謳った初期の代表的な詩であるが，それ以後も，ユゴーのナポレオン・ボナパルトに寄せる気持ちは強い。

こうした明白な背景があるにもかかわらず，なぜユゴーは，未定稿においては，ボナパルティストであった，いな，ある，ということを告白していないのであろうか。それは，あえていえば自身のボナパルティストとしての信条は，不動の良心そのものであり，今更，光に向かって向上すべきものではなかったのかもしれない。ボナパルティズムは，本質的にユゴー思想の底流をなしていたのである。

そこで本章では，こうした点を念頭に置きながら，ユゴーが未定稿の中で自己分析したのとは違う角度から，彼の思想遍歴をまとめてみることにする。理解を助けるために，以下のような期に分けて考察してみることにしよう[6]。

これは19世紀のフランスの政治体制の変化とほぼ軌を一にしている。

（1）第1期　1814—1830年

この時代は，ユゴーの思想の形成期であり，いわば基層部分の構築時であった。政治的には，ナポレオン・ボナパルトの第一帝政が崩壊した後の王政復古期（Restauration）にあたっている。

ヴィクトル・ユゴーは1802年2月26日，ナポレオン麾下の軍人（将校）ジョゼフ・レオポル・シジスベール・ユゴーを父に，船長の娘で伯母と田舎の農場で生活していた堅実な女性ソフィー・フランソワーズ・トレビュシェを母に，フランス東部の町ブザンソン（Besançon）で誕生した。ユゴーが幼い頃，父はナポレオン軍の職業軍人として任地へ赴くことが多かったため，家には不在がちであった。そのためユゴーは，母から影響を受けることが多く，母は熱心な王政主義者であったため，彼もまた幼い頃は王政を賛美していた。一方でユゴーは，早くからその詩的な才能を発揮し，15才の時には，アカデミー・フランセーズの詩のコンクールで選外佳作に選ばれた。そして，1822年，20才の時，処女詩集『オードと雑詠集』（Odes et Poésies diverses）を出版したが，それは王家を賛え，宗教を賛美していたので，国王ルイ18世（Louis XVIII）をいたく感動させた。その時，ユゴーは奨学金として年金1,000フランを受けるという栄誉に浴すことになった。また，1825年4月には，ユゴーの国王と教会への貢献が評価されて，レジョン・ドヌール（Légion d'honneur）勲章を授与された。しかも，同年5月のランスでの新国王シャルル10世（Charles X）の聖別式には正式に招待を受けた。じつに若き日のユゴーは，王党派一色といってもよいほどの王政主義者であった。

しかし，その詩の手法は，いわゆる形式や規則を重視する伝統的な古典派のそれではなく，人間の生命や魂の喜びを自由闊達に謳い上げるロマン主義の方法であった。ユゴーはその方法を駆使して，次から次へと作品を発表し，やがてロマン派の旗手として頭角をあらわしていった。ユゴーが22才の時，すなわち，1824年を機に，彼はロマン派の若きリーダとなった。思想的には王政主義，詩人としてはロマン派というのがその頃のユゴーの特徴であった。

ただユゴーは，王政を信奉していたが，たんなる保守主義者ではなかった。伝統の枠に閉じこもり，従来の形式に甘んじる慣習をよしとはしなかった。よりよきものを求め，そのためには従来の形式や規則を容赦なく変更することも辞さなかった。いな，積極的にそれらを打破していったのである。

ユゴーが生涯にわたって求めたもの—それは解放であった。人間の魂を自由にして，生命の歓喜を謳いあげていくことこそユゴーの最大のモチーフであった。そのために，彼がまず手がけたことは，文学の解放である。形式や規則にとらわれた死せる文学から，のびのびと人間の魂の自由を謳いあげる文学への転換。この文学の解放こそが，ユゴーにとって最初に取り組むべき課題であった。というのも，解放された文学は，必ず人間の解放をもたらすからである。ユゴーの人間の解放への旅

立ちは，まず文学の解放から始まったのである。

王政主義者でロマン派の旗手であったユゴーは，この時代においては，以上のように文学の解放者であっが，じつはこの期においてユゴーの内面では，もうひとつの重大な変化が生じていた。それはボナパルティズムへの傾斜である。1821年，ユゴーが19才の時，母ソフィが病死すると，それまで疎遠であった父との接触の機会が増大した。ナポレオン麾下の軍人である父は，ナポレオン・ボナパルトの熱烈な信奉者であり，彼は折りあるごとに，ユゴーに英雄ナポレオンの勇姿を語った。そうした中から，やがて青年ユゴーの胸中にはナポレオン・ボナパルトへの尊敬の念が芽生え，それは崇拝の気持となり，ついには，ひとつの信条へと昇華していった。その結晶が，1827年のナポレオン１世への憧憬の念をこめた詩集『ヴァンドーム広場の記念柱によせるオード』である。以後，ユゴーのナポレオン崇拝熱は，その後も一貫して変わることなく，生涯にわたってユゴーの思想の基軸を貫くことになるのである。

このようにユゴーの思想の形成期は，幼少の頃は母親の影響を受けて王政主義が強かったが，やがて父親に感化されてボナパルティズムがその深層部を占めていった。王政主義者にしてボナパルティストという二重構造がユゴーの思想形成の第１期の特徴だったのである。

（２）第２期　1830—1840年

この時代は，ユゴーの思想の転換期といえよう。政治体制としては1830年の７月革命（Révolution de Juillet）で復古王政が倒れ，七月王政（la monarchie de Juillet）が誕生し，それが継続していた時である。この時期に王政主義者であったユゴーにひとつの転機が訪れた。それは，自由主義への目覚めである。国王や一部の特権階層だけが政治権力を握るのではなく，フランス革命当時の人権宣言が謳ったように，主権は本来国民にある（le principe de toute souveraineté réside essentiellement dans la nation[7]）との思想が浮上する。政治的にも，自由の幅が広がることが人間の解放につながる，との思いが強まるのである。

ユゴーの思想に，このような転換をもたらしたのは，次の２の契機であった。ひとつは，批評家サント・ブーヴ（Saint-Beuve）との出会い，もうひとつは，1830年７月の７月革命であった。

1827年，ユゴーは戯曲『クロムウェル』（Cromwell）の序文（La préface）を著すが，それはロマン主義の宣言書となると同時に，批評家サント・ブーヴとの交際が始まる切掛となった。サント・ブーヴは自由主義的な考えの持ち主であり，ユゴーは彼から強い影響を受けた。1830年，ユゴーは劇作『エルナニ』（Hernani）を発表するが，それには自由主義が色濃く反映されており，以後，ユゴーは自由主義ロマン派と揶揄されるようになったのである。

このように，自由主義に傾倒していくユゴーに追い打ちをかけたのが，1830年の７月革命であった。政治的な自由を求めて勃発したその革命を目のあたりにしたユ

ゴーは自由主義が時代の思潮であることを見抜き，自らもまたその信条を，自由主義に転換させていったのである。

かくしてユゴーは，自由主義を信奉するようになるが，それとともに文学についての考え方も変化させていった。それは，これまでの古典主義からロマン派への転換という文学の世界の解放にとどまるだけではなく，解放された文学をもって，社会の解放にあたるとの信念をもつにいたったのである。たんに文学の世界だけに閉じ込もっているのではなく，弱者の救済という社会の解放にもかかわっていく必要があることをユゴーは痛感するようになる。その具体的な形が，刑法の改正，死刑廃止運動に取り組んだことであった。1829年，彼は『死刑囚最後の日』（Le Dernier Jour d'un Condamné）を出版し，それまで民衆にとってはひとつの娯楽として扱われていた死刑を神の意志に反し，人道主義に逆らう暴挙であると糾弾した。自由主義への覚醒とともに，ユゴーにとっては，文学は社会の不正を正し，社会的弱者を救済する手段として位置付けられるようになっていったのである。

ユゴーが自由主義と社会的解放を結合させるようになった背景には，当時の時代状況もあった。7月革命以後の，いわゆる七月王政の時代は，フランスの資本主義の土台が築かれた時であった。フランスは産業革命を経験し，その経済を発展させていた。しかし，経済や産業の発展とともに，社会的矛盾も浮上し，貧富の格差が拡大した。富める者は一部の富裕層に限定され，多くの民衆は貧困と悲惨の2字に喘いだ。犯罪をはじめ多くの社会的矛盾が露呈したのである。

こうした事態に直面したユゴーは，自由主義の価値を認めながらも，文学の力をもって，社会的弱者を救済することに挑戦した。とくに作家が，社会的関心をもつように力説したのである。1834年ユゴーは記した。「芸術は美だけを求めるのはもうやめよう。善も求めていこう。私たち作家は，社会に善を行う責任があるのだ」[8]と。と同時に，この間ユゴーは1841年，アカデミー・フラセ―ズ（l'Académie française）の会員となり，1845年には貴族院議員に任じられる。しかし，他方では，1843年，最愛の長女レオポルディーヌを不慮の事故で失い，塗炭の苦しみにも遭遇したのである。

この第2期において，ユゴーは社会の解放をめざすといったが，この段階ではまだ，社会問題の解決と実際の政治形態のあり方とを結び付けて考えてはいなかった。ユゴーは，主権が人民にあるのはよい。しかし，人民が実際にそれを行使することには反対であった。人民にはまだその能力はないとみていたのである。したがって，理想的な政治体制としては，賢明な君主が憲法にもとずいて政治を行なう立憲君主政がよいと考えていた。彼自身，社会の解放のために，本格的に政治にかかわっていこうとの思いは，まだ希薄であったといってよいであろう。

（3）第3期　1848―1873年

この時期は，第二共和政（la Seconde Répulique）から第二帝政（le Second Empire）を経て第三共和政（la Troisième République）に至る時である。1848年2

月，2月革命（Révolution de Février）が勃発すると，ユゴーは，国王ルイ・フィリップ（Louis Philippe）の長子の嫁であるオルレアン公妃による摂政制を支持し，街頭でそれを訴えたが，その声はたちまちのうちに，民衆の罵声によってかき消されてしまった。「まっぴらだ。国王も王妃ももうたくさんだ」との叫びが彷彿として湧き起こったのである。王政に対する民衆のそのような憤激を前にして，ユゴーは考え方の転換を余儀なくされた。すなわち，もはや民衆の力を無視することはできない。人民は主権をもつと同時にそれを行使できるのだと。また理想的な政治体制は，共和政であるとみなすにいたった。1849年，彼は自分は共和主義者になるということを正式に宣言した。

それと同時に，ユゴーは社会の解放のためには，政治の力が不可欠であると認識するにいたり，自らもまた，本格的に政治の舞台に立つことを決意した。彼は，1848年6月5日の憲法制定国民議会の補欠選挙に立候補して当選し，1849年5月13日の立法議会の選挙でもパリ選出の国会議員に選ばれたのである。

当初ユゴーは，文学の解放をもって社会を変革できると考えていたが，やがてそれでは不十分であると感じ，社会の解放そのものにかかわる必要性を痛感した。だが，それでも十分ではなく，ここに政治の力をもって社会改革に取り組むようになったのである。こうした変化は，民衆の力が台頭し，民衆が政治に参加する形態が成立していくにしたがって，政治の力がますます強くなっているということをユゴーが実感したからに他ならなかった。政治こそが，人間と社会を動かす鍵であると彼は確信したのである。

このようにユゴーは，当初，政治には距離を置き，言葉の力で社会を変革しようとしたが，やがて政治との距離をせばめ，政治にかかわっていくのである。それでも一時は，有力な政治家の助言者となり，政治を動かそうとしたが，やがては自らが政治に乗り出していくことになった。言葉を武器にするユゴーにとっては，文学もそして政治も言葉で表現するものとの認識があり，文学から政治の世界に行くのにもそれほど抵抗はなかったのである。

政治家ユゴーが政治においてまず手掛けたことは，人々の物質的生活の向上であり，また精神生活面での充実であった。前者については，ユゴーは立法議会の議員として貧困の撲滅にたち向かい，社会福祉の整備を訴えた。彼の考えによれば，一切の人間の不幸や悪は，貧困から生じるのであり，貧困が最大の障害であった。したがって，貧困の一掃を喝破したのである。後者については，教育の改革を主張し，とくに教育の自由を尊重した。同時に，人道主義や人々の行動の自由こそが人間の価値を高め，精神の豊かさをはかる方途であると論じた。政治と教育の分野における自由，無知と貧困の克服こそが，ユゴーにとっての最大の政治目標であったのである。

したがって，こうした観点からすると，後にユゴーと敵対関係に陥るルイ・ナポレオン・ボナパルト（Louis Napoléon Bonaparte），後の皇帝ナポレオン3世（Napoléon Ⅲ）との関係も，出会いの頃は決して悪くはなかった。2人の政治目標には共通する部分があったからである。

ユゴーは,1848年6月5日の憲法制定国民議会の補欠選挙で議員に選出されるが,その時,ルイ・ナポレオン・ボナパルトも4県から選出されていた。ルイは,当時は,ロンドンに亡命中であり,自分はフランスに対して野心をもつものではないということを喧伝するために,当選を辞退してしまった。ルイの作戦は功を奏し,ボナパルト家に対する同情が集まり,同家に対する追放令の解除に役立った。すると,同年9月の補欠選挙ではルイは再度立候補し,またも議員に選出された。今度は彼もそれを受諾して,9月24日,パリに合法的に帰還したのである。

そして第二共和国は,11月4日,第二共和政憲法を制定し,12月10日に大統領選挙を行なうと発表した。ルイ・ナポレオン・ボナパルトは,今度はその大統領選に立候補することを表明し選挙運動に入った。ユゴーは国会議員として,大統領選挙が公明正大に行なわれ,共和政が定着することに期待するという旨の声明を出したりしていたが,ある日,ルイ・ナポレオン・ボナパルトの訪問を受けた。他の3人の候補と競合していたルイは,国民の間で国民的な文化人として人気の高いユゴーの支持を取りつけることによって,選挙戦を有利に運ぼうとしたのである。ルイはユゴーに,自分は自由と民主主義のために貢献するので,是非支持をお願いしたいと要請した。

一方,ナポレオン・ボナパルトを崇拝するユゴーにしてみれば,ルイ・ナポレオン・ボナパルトは,彼の甥であり,今やボナパルト家の直系である。ユゴーは,ルイにナポレオンの面影を思い合わせて何ともいえない追慕の念にかられた。しかも,ルイは貧困の撲滅を謳い自由を賛美している。政治的信条もユゴーに共通するところが多かった。とくに,有力な政治家の顧問となって,現実の政治を動かしたいと考えていたユゴーにとっては,ルイ・ナポレオン・ボナパルトが大統領に当選すれば,その指南役となって政治を左右できるようになるとの思惑も働いたのである[9]。

かくしてユゴーは,ルイ・ナポレオン・ボナパルトへの支援を約束し,自らが創刊した「エヴェヌマン」(l'Événement) 紙上で,彼を支持する一大キャンペーンを張った。その甲斐もあってか,ルイ・ナポレオン・ボナパルトは,750万票もの得票をえて圧勝した。ユゴーも多くの民衆も,ルイに新しい時代の到来を期待したのである。

しかし,破局はすぐに訪れた。大統領になったルイ・ナポレオン・ボナパルトは,自分の大統領としての任期は,1852年5月の第2日曜日(9日)までであったが,やがて自らの再選が可能になるように憲法の改正を提案した。1851年7月19日,議会は憲法改正案に対して賛成446票,反対278票という結果を示したが,改正とするには97票足りなかった[10]。こうした議会の抵抗に対して,ルイ・ナポレオン・ボナパルトは,12月2日,クーデタを敢行し,議会を閉鎖してしまった。この暴挙に急進派の議員たちがたちあがり,彼らが中心となってただちに抵抗組織が作られた。民衆地区にはバリケードも構築され,その中には,ユゴーの姿も見られたのである。

ユゴーにしてみれば,ルイ・ナポレオン・ボナパルトは,自由民主主義,共和政

体を守ってくれる守護神のはずであった。そのルイが，自らの約束を反故にして，独裁に走ろうとした。これは，ユゴーにとっては許せない行為であった。以後彼は，ルイ・ナポレオン・ボナパルトを不倶戴天の敵とみなし，徹底抗戦を誓うのである。それは，イギリス領のジャージー島とガーンジー島への亡命という形をとって現われ，亡命先から，皇帝ナポレオン3世となったルイに言論のつぶてを浴びせ続けたのである。

だれよりもボナパルティストであったユゴーは，皮肉にもナポレオン3世と対立することになった。しかし，だからといって，ユゴーは，ボナパルティズムを放棄したわけではない。それどころか，ユゴーが否定したのは，あくまでも独裁者皇帝ナポレオン3世であり，ナポレオン・ボナパルトや自分の懐くボナパルティズム像には，むしろ強い確信を懐くのである。その証拠が，亡命時代にユゴーが執筆した数々の作品にあらわれている。とくに大作『レ・ミゼラブル』の中では，ナポレオン・ボナパルトへの追慕の念が深く表明されている。この点は，後に詳述するが，ユゴーにとって，皇帝ナポレオン3世を断罪することは，ボナパルティズムを否定することではなく，かえってボナパルティズムへの思いを強くすることであった。いな，ボナパルティズムへの思いが強かったからこそ，自分の理想に反したナポレオン3世を許すことができなかったといえよう。

この第3期は，ユゴーの人生にとっては，19年間に及ぶ亡命生活という激動期であったが，じつは思想的には，自由主義及び共和主義の円熟期であり，何よりもボナパルティズム信仰を不動のものにした時であった。

（4）第4期　1873—1885年

第二帝政は，1870年9月4日，普仏戦争でプロシアに敗北したことによって崩壊した。皇帝ナポレオン3世は，9月2日，スダンでプロシア軍に捕虜になったあと，イギリスに亡命した。第二帝政が崩壊し，9月4日に共和政が宣言されるや，5日にユゴーは19年間の亡命生活に終止符を打ちパリに帰還した。多くの民衆は，ユゴーに救国の士となることを求め，彼もまた，その期待に応えようとした。1871年2月12日，プロシアと平和条約を結ぶための国民議会（Assemblée nationale）が成立すると，ユゴーはその議員に立候補して，第2位の得票（21万4000票）でパリから選出された[11]。かってのように，自らが政界に身を置くことによって，社会の変革をはかろうとしたのである。

しかし，ユゴーの思いとは裏腹に，実際の政治は理想どおりには進まなかった。まず，国民議会に出席してみてユゴーが驚いたことは，その議会はおよそ共和主義的なものではなく，極めて保守的な性格の強いものであった。しかも，フランスのために尽力したイタリア人ガリバルディー（Garibaldi）の，アルジェリアでの当選を無効にするとの提案がなされると，ユゴーの怒りは頂点に達した。彼は，政界に対して深い失望と幻滅を感じ，3月8日，議員を辞職してしまった[12]。

しかも追い打ちをかけるかのように次男のシャルルが3月13日病死した。3月18

日には，パリ・コミューン（Paris Commune）が成立して，それは，フランス人同士が2つに分かれて，血で血を洗うという争いになってしまった。こうした過酷な現実を前にしたユゴーには，現実的なものより宗教的なものへの畏敬の念がますます強くなり，隆霊術に傾斜していくのである。

真の人間の解放とは，それはもはや社会的なものではなく政治的なものでもない。宗教の解放こそが真の解放ではないかとユゴーは思うようになった。貧乏と無知と肉体という三重の牢獄にとじ込められた民衆の魂を解放することこそが，真の自由であり，そうすることが文学の完成につながるとユゴーは確信するにいたるのである。

ユゴーが晩年，このような神秘主義に走った原因は，政治への絶望感や打ち続いた身内の不幸という事態があったかもしれない。しかし，一歩深く考察すると，ユゴーの思想には，宗教的なものは一貫して流れており，人間の魂への探求は彼の永遠のテーマとなっていたことがわかる。すなわち，ユゴーの思想は，表面的には変遷を重ねていたようではあるが，それはいたずらな流浪ではなく，人間の真の自由を求めての旅であり，魂の解放をもって真実の解放とする自己完成への道だったのである。隆霊術こそその到達点であり，そこでの死者との魂の交流が，ユゴーに真に自由を感じさせる時であった[13]。

3．ボナパルティズムへの共鳴

前章でものべたように，ユゴーは自らの半生をふりかえっての思想遍歴の中で，自分がボナパルティストであるということは独白していない。しかし，彼の作品を通して，彼がナポレオン・ボナパルトに強い思いを懐いていたことは確かである。1827年「ヴァンドーム広場の記念柱によせるオード」（『オードとバラッド』《des Odes et Ballades》）に代表されるように，ユゴーは数多くのボナパルティズムの詩をよみ，多くの人々を驚かせている。このように，ユゴーとボナパルティズムは深い関係にあり，ユゴーを理解するには，両者の関係を考察する必要がある。

そこでまず，ボナパルティズムとは何かという問題に一言触れておくことにする[14]。それは，一般的にはナポレオン体制の別名として広く用いられているが，経済的な観点や政治体制的な視点などからの分析も多数なされ多義的な側面をもっている[15]。ただここでは，「ボナパルトの政治体制や王朝への愛着」[16]という解釈をふまえながら，ナポレオン的なるものへの憧憬の念というにとどめておこう。英雄ナポレオン・ボナパルトの面影を偲びながら，自らもまた，ナポレオン的な生涯を歩みたいとの願望をもっていたといってもよいであろう。ユゴーは，文学の世界におけるナポレオンたろうとしたのである。ただ，ユゴーの時代における「ナポレオンはヨーロッパの国々にフランス革命の自由主義の思想を広めた英雄というふうに考えられていた」[17]という点は留意しておく必要がある。決してたんなる独裁者ではなかったのである。

1828年12月，ユゴーはナポレオン1世について謳った。

「とこしえに彼は立つのだ！
いたるところに！—燃えるような　また凍るような
彼の姿が　たえずわたしの思いをゆする。彼はわたしの精神に　創造の息吹きを吹き込む。
わたしはふるえ　口には言葉があふれでる，
巨大な彼の名前が　後光につつまれて
わたしの詩のなかに　すっくと立ちあがると。
（中略）
あなたは君臨する，われらの時代に。
天使か　悪魔か　それは問うところではない！
あなたのワシは翼に乗せて運びさる，
われわれを　息をつかせず。
目をそむけて見まいとする者も　いたるところにあなたを見出す。
われらの時代のあらゆる場面に　あなたは投げる，大いなる影を。
ナポレオンはとこしえに立つのだ，暗く燦然と
われらの世紀の入口に。」（『彼』）[18]

若きユゴーは，皇帝ナポレオンの偉大さを火山，灯台，巨人，太陽などにたとえて謳いあげている。そのナポレオン１世がなくなり，後世にのぞみを託した一子ナポレオン２世（Napoléon Ⅱ, François Charles Joseph Napoléon Bonaparte）も，1832年７月，ウィーンでオーストリア政府の監視下に置かれたまま世を去った。その時ユゴーは，『ナポレオン２世』と題する詩で次のようによんだ。

「父親も子供もいまはこの世にいない。——
主よ，あなたの御手は恐ろしい！
あなたはあの無敵の支配者，かずかずの勝利をおさめた　あの男を　まず手にかけられ，その後息子を葬って納骨堂を仕上げられた。
父と子の屍衣（しい）を縫うには
十年あれば充分だったのだ！」[19]

ユゴーは，ナポレオン２世の死を惜んだ。というのも，７月革命以後の不安定な社会を安定させ，フランス革命がはじめナポレオン１世が引きついだ偉大な事業を完成させるのは，ナポレオン２世しかいないと思っていたからである。七月王政は，自らもまた政権の安定のためには，「ナポレオン伝説」を利用するしかないと考え，1840年，ナポレオンの遺骨をセント・ヘレナ島からパリに戻すことに成功した。その時の様子を，ユゴーは『ナポレオンの葬列』と題して記した。

「家に戻って，わたしは今日一日を振りかえった。今日ナポレオンが通った，この同じアンヴァリッド前広場の中央に，今から10年前，1830年の７月革命の折に，ラファイエットの記念像が建てられた。（中略）ラファイエットがすっかり忘れ去られているのに対して，ナポレオンは今でもみんなの心に生きているからである。ラファイエットは一時代を画した人物というだけのことだ。だが，ナポレオンは不滅の天才なのだ[20]」と。

さらにユゴーは，第一帝政の崩壊とともにフランス国外に永遠追放になったボナパルト一家を守るために熱弁をふるった。1847年6月14日，ユゴーは貴族院で，ナポレオン1世の弟で，元ウェストファリア王のジェローム・ナポレオン・ボナパルトから出された嘆願について擁護した。そこには，ボナパルト一家の追放条項を廃止して，一家の帰還を認めてあげたらどうか，と訴えられていた。ユゴーは，それを承認するように議員たちに呼びかけたのである。その結びでユゴーは次のように主張した。

「みなさん，そうしたナポレオンの罪とは以下のものです。キリスト教の再興，民法典の起草，自然の境界を越えたフランス領土の拡大，マレゴン，イエナ，ワグラム，アウステルリッツといった数々の戦勝，偉大な人間が偉大な国民にもたらした，これまででもっとも輝かしい力と栄光の贈り物，そうしたものであります！」[21]と。ユゴーのナポレオン1世を慕う気持は終生変わることなく，彼のボナパルティズムへの信条は晩年になるほど強くなっていったのである。

では，ユゴーとボナパルティズムを結びつける接点は何であったのであろうか。換言すれば，ユゴーは，ボナパルティズムのどこに共鳴したのであろうか。以下，両者の共通点を考察してみよう。

第1に，ユゴーのロマン主義の信条である。たんに理性だけで物事をとらえようとするのではなく，理性も情念も含めた無限の全体性。そうした視野から物事の本質に迫ろうとするユゴーにとって，ナポレオン1世はまさに巨大な存在であった。一人の力でフランスを変え，ヨーロッパを動かし，新しい時代を創造する。英雄ナポレオン1世の勇姿こそ，ユゴーのロマン主義の心情をかきたて，それを具現化したものに他ならなかった。巨大なもの，偉大な人物に畏敬の念を懐き，自らもまたそうなろうとするユゴーにとって，ナポレオン1世は，理想の人間というよりも，自己の胸中に躍動する自分の生命そのものだったのである[22]。

第2に，ボナパルティズムのもつ人民観である。ナポレオン1世は人民の力を重視していた。彼は次のように力説した。「フランスでは大衆に頼ってしか偉大なことはできない。それに，政府は支持のあるところへ行って支持を求めるべきである。物質の法則と同じく精神の法則にも，曲げることのできない，是非ない法則がある」[23]と。ボナパルティズムは，「人民―大衆の真の代表であることを必ずしも意味しないが，しかし革命のあとで，現実に政治過程から疎外され，不満を抱いた人民―大衆が存在しており，その存在なくしてはボナパルティズムが成立しえなかったことはたしかである」[24]。ボナパルティズムは，封建社会から近代社会の転換期にあって，新たに台頭してきた人民―大衆に焦点をあてていたのである。

このような人民―大衆重視の姿勢は，ユゴーと共鳴する部分があった。彼もまた，19世紀に入って，台頭する産業社会の中にあって，ややもすると取り残されそうになる民衆に光をあてた。とくに，社会的矛盾の狭間に喘ぐ女性や子供たちに限りない慈愛の眼を注いだ。ユゴーは当初は，大革命の遺産である人民主権は尊重し，人民にも主権が存在することは認めていたが，人民がそれを行使することには危惧を懐いていた。暴力を憎むユゴーには，民衆反乱を起こす民衆の統治能力にはまだ不

安があると思えたからである。しかし，やがて2月革命に接することによって，彼は民衆の真の台頭を認識し，人民が主権をもつことも行使することも認めるにいたった。その結果，彼は共和政体を支持するようになるのである。このような，人民—大衆に寄せる信条というものが，ユゴーとボナパルティズムを結びつける第2の要因であった。

第3に，自由についての観念である。ユゴーの生涯に変わらぬモチーフは真の自由とは何か，という問題の追求であった。その探求心は，すでに見たように文学の解放から社会の解放，政治の解放，そして宗教の解放へと向かっていった。真の自由の価値の実現こそ，ユゴーの胸中に去来してやまない目標であった。

ナポレオン1世もまた，フランス革命の理念のひとつである自由を尊重した。「私は民衆の子である。民衆が真に自由を欲するならば，私は民衆に自由を与えなければならぬ」[25]。また彼はいう。「私の息子は言論の自由によって君臨せざるをえないであろう。言論の自由は今日の必然である」[26]と。ナポレオン1世は「なによりも『自由』を実現した偉人として描きだされる」[27]のである。これは，甥のルイ・ナポレオン・ボナパルトが強調したことであった。

このように，自由についての具体的内容になると少々の検討を必要とするが，形の上では自由を強調しているボナパルティズムと真の自由を求めるユゴーとは共鳴する部分が多かったのである。

第4に，その平和観である。ナポレオン1世もユゴーも，ヨーロッパの平和のためには，各主権国家の壁を超えて，統一した欧州という形態が望ましいと考えていた。ナポレオンはいう。「ヨーロッパという同じ大地に住みながら，革命や政治の争いによって分裂してしまった人々を，私はひとつにまとめたかったのだ」[28]。「私は国内の諸々の党派を融和させていたのと同様に，ヨーロッパの諸国のおおきな利害の融和を準備しようと思っていたのである」[29]等々と。こうした欧州統一の考え方はユゴーにも通じるものがある。1849年8月21日から24日まで，パリで国際平和会議が開かれた時，ユゴーはその議長をつとめた。席上ユゴーは，「開会の辞」で，武力による勝利がいかに無意味であるかを力説して訴えた。「フランスよ，あなたが，ロシアよ，あなたが，イタリアよ，あなたが，イギリスよ，あなたが，ドイツよ，あなたが，ヨーロッパ大陸のすべての国，あなたがたすべての国が，各々の特質と各々の輝かしい個性を失うことなく一つに溶けあい，より高次元の統一を実現する日がきっと来る」[30]，「アメリカ合衆国とヨーロッパ合衆国という（拍手喝采），互いに向きあう二つの巨大な国の集合体が，海を越えて手を差しのべあい，その製品と交易と産業と芸術と天才たちを交流させ，地球に新天地を開き，砂漠を開拓し，創造主の見守るなかで被造物を改良し，人間同士の友愛と神の全知全能という無限の二つの力を結合させて万人の幸福を実現させるのを見る。そんな日がきっと来る！」[31]。ナポレオン1世もユゴーも欧州の平和を夢見て，その手段として，欧州統一を構想したのである。理想的すぎる嫌いはあるかもしれないが，それがまた2人のロマンをかきたてるところとなり，ユゴーはボナパルティズムのもつ，こうした雄大な理想に深い共鳴を覚えたのである。

このように，ロマン主義，人民，自由，平和というものを鍵概念として，ユゴーはボナパルティズムに深い共鳴を寄せた。しかもボナパルティズムは，それら4つを柱としながらも，さらにそれらを融合させながら，ひとつの神秘的な雄大さを漂わせていた。それがまた，宗教的なものに畏敬の念を懐くユゴーの心情に合致し，ボナパルティズムはユゴーの胸中に深く焼き付いていたのである。

4．ボナパルティズムの形成

ユゴーの思想というか，心情の中に，ボナパルティズムへの共鳴が強く存在していたことは，これまでみてきたとおりである。では，ユゴーのボナパルティズムへの共鳴は，どのようにして形成されたのであろうか。その原因を分析してみることにしょう。それには，3つの視点からの形成要因が考えられる。

第1に，父親からの影響であり，心理的な刷り込み要因といえよう。ユゴーは当初，王党的な考え方の持主であった母親の影響を受けて，王政主義者であった。しかし，母親が病死して，父親と接触する機会が増大するにしたがって，熱烈たるナポレオン崇拝主義者の父親に感化されて，彼もまたナポレオンを尊敬するようになっていった。しかしそれは，むしろ彼の魂の底に眠っていたナポレオンへの憧憬の念が覚醒されていったという方が適切かもしれない。彼が19才の時であった。もちろんそれには，若干の時間的落差があった。具体的には，ユゴーは国王ルイ18世から年金をもらったり，国王や教会に尽くしたりしていた。すなわち，王政主義的な思想をもちながら，心理的にはボナパルティズムを形成するという二重構造をもっていたのである。

第2に，時代状況的な原因である。ユゴーは，7月革命の頃から自由主義を信奉するが，それは時代的には七月王政期にあたっていた。七月王政は，復古王政末期の保守反動的なあり方を反省して，できる限り自由を拡大して民衆の支持をえようとつとめた。しかし，政治，社会的な安定を確保するのには，もう一歩決め手を欠いていた。そこで，七月王政が利用したのが，復古王政の反動から，ナポレオンの時代を追慕する民衆の感情であった。民衆のナポレオン崇拝熱を巧みに用いて，政権の安定につとめたのである。そのために七月王政は，1836年，ナポレオンが着工し，未完成であったエトワール広場での凱旋門を完成させ，1840年には，ナポレオン1世の遺骸をセント・ヘレナ島からパリに帰還させた。かくして七月王政は，ナポレオン1世を大切にするとの印象を民衆に与え，民衆の支持をえることに成功した。同時に七月王政期に，ボナパルティズム信仰は最高潮に達したのである。経済的にも，産業の興隆に成功して，フランス資本主義の土台がこの期に作られた。

なお，この時期，不思議なことにナポレオン崇拝熱は，フランスだけではなく，ヨーロッパでも盛り上がり，ドイツのハイネ（Heine）やゲーテ（Goethe），イギリスのカーライル（Carlyle）らもナポレオン1世を賛美したのである[32]。

こうした時代状況は，時流に敏感なユゴーを刺激し，彼の父親から受けたナポレオン崇拝熱はいやがうえにも高まり，彼のボナパルティズム信仰は頂点に達したの

である。

第3に，ユゴーのもっていた宗教的情念の高揚とナポレオン崇拝熱との融合である。ユゴーは晩年にいたって，政治に失望し，身内の不幸も重なったこともあって，現実とのかかわりをもつというよりも，むしろ霊的，神秘的なものとの交流に傾斜していった。とくに降霊術に没頭し，それを通して死者との対話をはかることによって，自己の魂の自由を享受していった。その中で，ナポレオン1世との対話は，彼の重要な心の支えであった。たとえば，次のような実験の場面がある。

「ヴァクリー地上に文明を押し広める当代の偉人の列挙を続けておくれ。

——シャトーブリアン〔フランス・ロマン主義の作家。政治家としては外務大臣を務めた〕。

ユゴー——偉人の名前をおまえが偉大だと思う順に挙げているのか，それとも偶然に任せて挙げているのか？

—偶然などというものは，

ユゴー——列挙を続けなさい。

—ナポレオン。

ユゴー——大ナポレオンのことだな？

—もうひとりのほうは墓場のみみずだ。[33]」

ユゴーは若い頃，文壇のシャトーブリアンになることを夢みたが，1827年，今度は文壇のナポレオンたらんとしたことがある。シャトーブリアンとナポレオン1世は，ユゴーにとって，長年にわたって自己の胸中に輝く理想像だったのである。

さらにユゴーは，ガーンジー島で『レ・ミゼラブル』を完成させたが，その締めくくりにあたっては，古戦場ワーテルローを訪れ，ナポレオンを偲びながらその筆を置いている。そこでユゴーは，ナポレオン1世を自分の宗教的信条のうえから捉え直し，独特のナポレオン像を描き出している。それが，ユゴーのボナパルティズムの側面を形成しているのである。ワーテルローにたったユゴーは自問する。

「ワーテルローにおいては，一連の偶然が双方の指揮官を支配している。そして，あの運命という不思議な報告については，わたしは無邪気な裁判官として判決をくだしたい」[34]。ユゴーは，ワーテルローの戦いは，ナポレオン1世とウエリントン，フランスとイギリスとの戦いというよりも運命に導かれたものであったとみる。それはまた，ナポレオン1世にとっては，もはや彼の時代が終ったことを意味していた。

「ボナパルトがワーテルローの勝利者となる，それはもはや19世紀の原則にあっていなかった。ナポレオンがもはや地位をしめることのできない他の多くの事実が生じかかっていた。ナポレオンには不幸な世運の意志がすでにずっと以前に宣告されていた。この巨人の倒れるべき時機は来ていた」[35]。「ワーテルローは一個の戦闘ではなかった。それは，ひとつの世界の方向転換であった」[36]。世界がひとつの運命，神の意志に導かれているとユゴーはみるが，彼の言葉はさらに続く。

「ワーテルローは19世紀の肱金（ひじがね）であった。その偉人の消滅は，一大世紀の出現に必要であった。人間の力のおよばぬある存在がそれにあずかっていたのだ。英雄た

ちの狼狽ぶりも当然のことであった。ワーテルローの戦いには，戦雲の去来以上のものがあった。流星があった。神のお通りがあったのだ」[37] と。

歴史が人間の力をこえた偶然や運命，いな神の力によって動かされるとみるユゴーは，それだけにナポレオン１世の出現も神の意志によるものであったと暗示し，ナポレオン１世への憧憬の念を強めるのである。ナポレオン１世はその役割を終えて舞台を下りたが，ユゴーからみると，ナポレオンが去ったあとのヨーロッパは決してよくなったとはいえない。ユゴーは，神の意志に反するかのようにいう。

「ヨーロッパの奥底は，ワーテルロー以後，暗黒となった。ナポレオンの消滅によって，ある巨大なものが空虚のままながく残されたのである」[38] と。そして，ナポレオンの言葉をひいて歴史の流れを次のように断言する。

「1792年以来，ヨーロッパに起こったあらゆる革命は，フランス革命の一分子である。自由の精神はフランスからその光を放つ。これは天日のごとく明らかな事実である。それが目にみえぬ者は，めくらだ。これはボナパルト自身の言葉である」[39]。

ユゴーにとっては，ナポレオン１世は決して消えることのない運命的な存在であった。それは自由の精神となって，人々の心の中に生き続けるのである。それだけに，晩年のユゴーが宗教的，神秘的なものに傾斜すればするほど，自由の魂としてボナパルティズムへの信条は強くなっていった。ユゴーの宗教的情念が，彼自身のボナパルティズムの形成を促進していったのである。それはまた，換言すれば，ユゴーがボナパルティズムのもつ神秘的な英雄主義とでもいうべきものに傾倒すればするほど，自身の宗教的情念も強くなるという相乗作用が働いていたといえる。

ともあれ，以上のような３つの要因が契機となって，ユゴーのボナパルティズムは形成されていったのである。

５．ナポレオン３世との対立

ユゴーはナポレオン１世を崇拝し，敬慕していた。したがって，1848年10月下旬，第二共和政の大統領選挙を前にして，ルイ・ナポレオン・ボナパルトがユゴーの自宅を訪ねてきて選挙の応援を依頼した時，彼は快諾した。その理由は，主に以下の理由からである。

第１に，ルイ・ナポレオン・ボナパルトは，ナポレオン１世の甥にあたり，ボナパルト家の直系の跡取りである。ユゴーは，彼の中にナポレオン１世の面影をみて，追慕の念にかられ，彼にボナパルト王朝の再興を託したのである。

第２に，ユゴーには政治への関与の方法として，有力者の顧問役となり，その立場を通して自分の考えを政治に反映させたいとの構想があった。ルイ・ナポレオン・ボナパルトに会ったユゴーは，彼が大統領になった暁には，彼を通して自分の構想を実現しようとの思惑を働かせたのである。

第３に，ルイ・ナポレオン・ボナパルトが，自由を尊重し，共和主義を支持すると表明したからである。「罪深い英雄であるナポレオンと，よき市民であるワシントンのどちらになりたいかときかれたら，わたしはワシントンと答えます」[40] とい

うルイの言葉をユゴーは信じた。彼を民主主義の擁護者とみたのである。

かくしてユゴーの後楯は功を奏し，ルイ・ナポレオン・ボナパルトは，1848年12月の大統領選挙で圧勝し，大統領に選出された。本来ならばユゴーは，その思惑どおり，ルイ・ナポレオン・ボナパルトを庇護しつつ，自分の理想を実現する筈であった。だが，現実はそれとは反対に，二人は間もなく敵対関係へと陥るのである。その最大の理由は，ルイ・ナポレオン・ボナパルトが，大統領の再選を禁じている憲法を改正し，皇帝になろうとする野心をあらわにしたところにあった。1851年12月2日，ルイ・ナポレオン・ボナパルトはクーデタを決行し，議会を解散して，パリに戒厳令を発した。ユゴーは抵抗委員会のメンバーとなり，そのクーデタを糾弾するが，官憲の手は彼の身辺にも及んだ。ついに彼は，1851年12月11日，ベルギーへ脱出し，以後19年間に及ぶ亡命生活に入るのである。

だが，その亡命生活は決して沈黙の日々ではなかった。ユゴーは，ルイ・ナポレオン・ボナパルトに，また，皇帝ナポレオン3世となった彼に，言論のつぶてを浴びせ，痛烈に批判，攻撃を繰り返したのである。

「ルイ・ボナパルトはフランスを殺した！　ルイ・ボナパルトは母親を殺した！」[41]。「ルイ・ボナパルトとは何か？　それは生きた偽りの誓いである。嘘はつかずにはめる詐術の化身である。肉と血をそなえた背信である。将軍の帽子をかぶり，自分を陛下と呼ばせる背誓である」[42]。ユゴーの糾弾はさらに続く。「ああ！　ルイ・ボナパルトは人びとを殺す以上のことをしたのだ。彼は人びとの精神を弱体化した。市民の心を矮小化した。いまこの時に，自己放棄と義務の厳しい道で，粘り強くやっていくためには，不撓不屈の種族であらねばならない。私はどのような物質的繁栄の病根が公衆の正直さを腐敗させようとするのか，わからない」[43]と。

ユゴーのルイ・ナポレオン・ボナパルトに対する批判は，『懲罰詩集』(Châtiments) や『小ナポレオン』(Napoléon-le-Petit) をはじめ，いろいろな詩や著作の中で執拗に続けられた。それは，ルイ・ナポレオン・ボナパルトの人間性，人格，行動を徹底的に糾弾するものであった。「いや，自由よ！　いや，民衆よ！あいつを死なせてはならない！　ああ！　そうだとも。話があっけなさすぎる，本当に。あいつは法を破壊し，時の鐘を鳴らして，神聖な廉恥心を，空へふたたび舞いのぼらせてしまったのに」[44]（『あの男に呪いあれ』）。「こんな罪を犯した男は悪辣きわまりない，人間の屑なのである」[45]。一読すると，ユゴーのルイ・ナポレオン・ボナパルトに対する批判は，何か個人的な恨みがあるのではないかと思わせるほど激しい個人攻撃になっている[46]。詩の形をとっているものが多いだけに，そう思わせるのであろうが，それほどユゴーにとっては，ルイ・ナポレオン・ボナパルトの背信は許せなかったのである。

だが，ここで注意しなければならないことは，ユゴーのルイ・ナポレオン・ボナパルトに対する批判は，決してボナパルティズムそのものの放棄にはなっていないということである。いなむしろ，ユゴーはルイ・ナポレオン・ボナパルトに対する批判を通して，むしろナポレオン1世に対する敬慕の念を高めているのである。

「農民よ。皇帝といえども二人いるのだ！　偉大な皇帝と卑小な皇帝，光輝な皇

帝と破廉恥な皇帝，大ナポレオンと小ナポレオンとがね！」[47]。「ルイ・ナポレオンはナポレオン1世のように皇帝になりたがった。こうして二人を比べるとほとんど同じようだが，実際は，帝国を征服した人間と帝国を詐欺でからめとった人間という違いが多少はあると言えるだろう」[48]。「この甥はえらそうに，伯父である皇帝の真似をしているだけなのに。ああ，なんということだ！　あの広大無辺なナポレオンの光輝を消し去るには，甥のやったようなひどい汚辱の行為が必要だったのだ！」[49]。

ユゴーにとっては，ナポレオン1世の存在は絶対的なものであった。それに比べると，ナポレオン3世はもはや否定し，抹殺すべき者以外の何物でもなかった。本来，ボナパルティズムとは，ナポレオン1世とナポレオン3世の統治理念や体制のことをさすのであるが,ユゴーにはもはやナポレオン3世のことは念頭になかった。むしろ消去すべき対象となったのである。

ユゴーにしてみれば，ナポレオン1世に対する尊崇の念は強く，ナポレオン3世を弾呵したからといって，ナポレオン1世によって原型が築かれたボナパルティズムを損なうものではなかった。いなむしろ，理念型としてのボナパルティズム信仰が強かっただけに,それに反したルイ・ナポレオン・ボナパルトを糾弾することが,かえってボナパルティズムへの信条を高揚させることになったのである。

6．結語—逆説の論理としてのボナパルテイズム

ルイ・ナポレオン・ボナパルトは，ナポレオン1世の跡を継ぎ，伯父の理想を実現しようとした。あらゆる政治的，社会的党派の利益要求を融合させ，調和させようとした。国民一致による政治的統合を成就し，経済の繁栄，社会の発展，そして国際環境の安定をはかろうと試みた。彼には自らがボナパルティズムの真の完成者であるとの自負があり，時には伯父のナポレオン1世をも凌駕しようとの野心もあった。決して伯父のカーボン・コピーで終ることでは満足しなかったのである。

複雑な政治的，社会的状況に対応するためには，政治家は時として多面的な行動をとらざるをえないことがある。社会的な秩序を維持するためには，強力なリーダーシップを発揮する必要がある。それが独裁的と思われる場合もあろう。国際環境を安定させるといっても，自国が何もしないですむというわけにはいかない。時には，海外への侵出を積極的にはからざるをえないこともある。政治は生き物であり，つねに流動している。一刻として休むことがない。決して固定化したり静止したりするものではないのである。ルイ・ナポレオン・ボナパルトも，こうした流動性の激しい政治的な状況に立ち向かわなくてはならなかった。そのために，その行動は時として多様性を帯びざるをえず，権謀術数も必要であった。決して単純，直截的な形ですますわけにはいかなかった。しかし，詩人であり，ある意味では物事を簡潔に捉えるユゴーには，ルイ・ナポレオン・ボナパルトのそのような行動様式には理解できない面があった。不可解であり，時には不信感を惹起する場面も多かった。とくに，彼がボナパルティズムの真の体現者となり，伯父のナポレオン1世を凌駕

しようとすることなどは全く許すことができなかった。かくしてユゴーは，ルイ・ナポレオン・ボナパルトを徹底的に扱き下ろしたのである。

「ルイ・ボナパルトは中背で，冷ややかな青白い顔をし，立ち居振る舞いがのろのろして，まだ，目がぱっちり開ききっていない人間みたいだ」[50]。「ルイ・ボナパルトは自分のやったことを，必然的な行為だとか偉大な行為だと呼んでいるが，そうしたことを考えずに，この男を公正に評価してみたらどうだろう。こいつはまさに俗っぽく，幼稚で，芝居がかった，自惚(うぬぼ)れた人物と言える」[51]。「この甥はえらそうに，伯父である皇帝の真似をしているだけなのに。ああ，なんということだ！　あの広大無辺なナポレオンの光輝を消し去るには，甥のやったようなひどい汚辱の行為が必要だったのだ！」[52]。「ナポレオンを殺したのは，ルイ・ボナパルトにほかならなかった。ハドソン・ロウはその命を奪っただけだが，ルイ・ボナパルトはその名誉を無にしてしまったのである」[53]。

ユゴーはなぜここまで激しくルイ・ナポレオン・ボナパルトを指弾したのであろうか。ルイが自由主義，民主主義を擁護するとの約束を破ったから，との理由はすでにのべた。また，一説には，ルイ・ナポレオン・ボナパルトが，大統領に当選した暁には，ユゴーを文部大臣にすると誓ったが，それが履行されなかったからではないかとの感情的な痼り説もささやかれている[54]。しかし，じつはユゴーがルイ・ナポレオン・ボナパルトを許さなかったのは，もっと深いところに理由があった。それは，ユゴー自身の中に，自分の方が真のボナパルティストであるとの自負があったからである。

当初ユゴーは，ルイ・ナポレオン・ボナパルトの中に，ナポレオン１世の面影をみた。彼を支持し，彼を通して自分のボナパルティズム像を具現化しようとしたのである。しかし，間もなく彼は，その方法に齟齬を感じるようになった。ルイ・ナポレオン・ボナパルトが，ナポレオン１世とは似ても似つかない人物のように思えてきたのである。とともに，彼が伯父以上の存在になりたがっていることを感じた時，ユゴーは激しい嫌悪感とともに怒りを覚えた。それはユゴーにとっては，ナポレオン１世は尊崇の対象であり，他の誰人も彼を凌駕することはできない絶対的存在であったからである。ところが，ルイ・ナポレオン・ボナパルトは，ややもすると，ユゴーのこうした理想を踏みにじり，彼の夢を汚泥で汚そうとするかのようであった。

ルイ・ナポレオン・ボナパルトは，伯父の理想を実現しようとするボナパルティストであったが，ユゴーもまた，それ以上のボナパルティズムの信奉者であった。すなわち，二人はボナパルティズムを同じ基盤としながらも，本質的には相容れないライバルだったのである。それだけに，ルイ・ナポレオン・ボナパルトのややもすると野心的な行動は，ユゴーにとって，許せないものであった。そのため，その敵対心を激しく燃えあがらせたのである。ユゴーの19年間にわたる亡命生活は，独裁者皇帝ナポレオン３世に対するたんなる徹底抗戦ではなかった。それは，ユゴー自身のボナパルティズム信仰を純化するために，絶対に必要な自己への戦いでもあったのである。

こう考えると，「青白い顔，やせて骨張った横顔，大きな鼻，口髭，狭い額に垂れ下がったちぢれ毛，ちっちゃなどんよりした目，おどおどした不安そうな態度。こうしたものが，笠をつけたランプの光を受けて浮き出て見えた。何ひとつとして皇帝ナポレオンに似ているところなどない」[55] との一文も，一見ルイ・ナポレオン・ボナパルトに対する個人攻撃のようにみえるが，じつは本質はそれにとどまらず，ユゴーの強固なボナパルティズム信仰をさらに昇華させようとする挑戦でもあったということがわかるであろう。

注

1）稲垣直樹『ヴィクトル・ユゴーと降霊術』水声社，1993年，14頁。

2）Roger Daval, *Histoire des idées en France*, Collection Que Sais-Je? N°593　串田・中村訳『フランス社会思想史』白水社，1991年，97頁。

3）稲垣直樹『レ・ミゼラブルを読みなおす』白水社，1998年，24頁

4）ユゴーにおける詩を分析しながらボナパルティズムを論じたものに次のものがある。西川長夫「ヴィクトル・ユゴーの詩におけるボナパルティズム」『フランスの近代とボナパルティズム』岩波書店，1984年，361-395頁。

5）稲垣直樹編訳『私の見聞録　ヴィクトル・ユゴー　歴史の証言として』潮出版社，1991年，229頁。

6）ユゴーの生涯等については，ユゴーの作品ならびに次のものを参考にした。辻昶『ヴィクトル・ユゴーの生涯』潮出版社，1979年。
アンドレ・モロワ（辻昶，横山正二訳）『ヴィクトル・ユゴーの生涯』新潮社，1969年。
金柿宏典「解説ユゴーⅠ」『世界文学全集12　レ・ミゼラブル』集英社，昭和61年。
辻昶・丸岡高弘『ヴィクトル・ユゴー』清水書院，昭和62年。
金子守『ヴィクトル・ユーゴーの世界』駿河台出版社，1995年。
稲垣編訳，前掲書。
Yres GoHin, *Victor Hugo*, Presses Universitaires de France, 1987.
Sophie Grossiord, *Victor Hugo《Et S'il N'en Reste Qu'un...》*, Découvertes Gallimard, 1998.

7）Maurice Duverger, *Constitutions et Documents politiques*, Presses Universitaires de France, 1966, p.3.

8）辻昶『ヴィクトル・ユゴー』第三文明社，1991年，89頁。

9）金子，前掲書，266頁。

10）河野健二「第２帝政とブルジョア化の完成」河野健二編『フランス・ブルジョア社会の成立』岩波書店，1977年，16頁。

11）Sophie Grossiord, *op.cit.*, p.117.

12）*ibid.*

13）この問題についての詳細は，稲垣直樹，前掲書『ヴィクトル・ユゴーと降霊術』を参照。

14）ボナパルティズムについての文献は大変に多いが，ここでは代表的なものとして以下

のものを挙げておく。

Frédéric Bluche, *Le Bonapartisme*, Presses Universitaires de France, 1981.

Frédéric Bluche, *Le Bonapartisme Aux origines de la droite autoritaire (1800-1850)*, Nouvelles Editions Latines, 1980.

"Bonapartisme", dans sous la direction de Jean Tulard de I'nstitut, *Dictionnaire Du Second Empire*, Fayard, 1995. pp.180-188.

R.S.ALEXANDER, *Bonapartism and revolutionary tradition in France The fédérés of 1815*, Cambridge University Press, 1991.

西川，前掲書。

河野，前掲書。

15) 詳細な解説は，河野，前掲書，20頁参照。ボナパルティズムというと，ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級対立の上に成立する均衡体制とかいう経済的な観点，もしくは，中道独裁体制とかいう政治形態，すなわち，統治システムの観点からの捉え方が一般的である。本稿ではそうした観点からではなく，むしろナポレオン的なるものへの憧憬の念という視点からこの問題を論じている。

16) *Petit Larousse*, Librairie Larousse, 1972, p.111.

17) 辻，『ヴィクトル・ユゴー』前掲書，73頁。

18) ヴィクトル・ユゴー文学館第1巻（辻昶　稲垣直樹　小潟昭夫訳）『詩集』潮出版社，2000年，323-326頁。

19) ヴィクトル・ユゴー文学館第1巻，前掲書，56頁。

20) ヴィクトル・ユゴー文学館第9巻（小潟昭夫　稲垣直樹訳）『死刑囚最後の日　見聞録／言行録』潮出版社，2001年，109-110頁。

21) ヴィクトル・ユゴー文学館第9巻，前掲書，268頁。

22) 若き日のユゴーは，文壇のシャトーブリアンをめざした。「シャトーブリアンになること以外はごめんだ」（Être CHATEAU-BRIAND ou RIEN）。SOPHIE GROSSIORD, *op.cit.*, p.13.

23) オクターヴ・オブリ編（大塚幸男訳）「ナポレオン言行録」岩波文庫，1983年，210頁。

24) 西川，前掲書，143頁。

25) オクターヴ・オブリ，前掲書，169頁。

26) 同上，213頁。

27) 西川，前掲書，140頁。

28) ティエリー・レンツ（福井憲彦監修）『ナポレオンの生涯　ヨーロッパをわが手に』創元社，1999年，106頁。

29) オクターヴ・オブリ編，前掲書，190頁。

30) ヴィクトル・ユゴー文学館第9巻，前掲書，289頁

31) 同上，289頁。

32) 西川，前掲書，322頁。

33) 稲垣，『ヴィクトル・ユゴーと降霊術』前掲書，79頁。

34) ヴィクトル・ユゴー（齋藤正直訳）『レ・ミゼラブルⅡ』潮文庫，昭和45年，22頁。

35) 同上，47頁。
36) 同上，50頁。
37) 同上，65頁。
38) 同上，83頁。
39) 同上，109頁。
40) ヴィクトル・ユゴー文学館第9巻，前掲書，174頁。
41) ヴィクトル・ユゴー文学館第8巻（金柿宏典　佐藤夏生　庄司和子訳）『海に働く人びと　小ナポレオン』潮出版社，2001年，387頁。
42) 同上，388頁。
43) 同上，398頁。
44) ヴィクトル・ユゴー文学館第1巻，前掲書，86頁。
45) ヴィクトル・ユゴー文学館第8巻，前掲書，343頁。
46) 河野健二は，この点について，マルクスの指摘を紹介し，「ユゴーはクーデタをナポレオン個人に帰着させることで，『その個人を小さくしないで，かえって大きくしている』（マルクス＝エンゲルス選集，五巻下，422頁）ことになった。勝負はユゴーの負けであった」（河野，前掲書，22頁）とのべている。ユゴーには，もう少し客観的な歴史構造分析が必要であったということであろう。
47) ヴィクトル・ユゴー文学館第8巻，前掲書，365頁。
48) 同上，353頁。
49) 同上，371頁。
50) 同上，351頁。
51) 同上，351頁。
52) 同上，371頁。
53) 同上，371頁。
54) 松田清「第二帝政の成立とV・ユゴー」河野編，前掲書所収，329頁。金子守，前掲書，267頁。
55) ヴィクトル・ユゴー文学館第8巻，前掲書，337頁。